堂山古墳出土の頭椎大刀

——群馬県千代田町光恩寺収蔵資料の基礎調査——

徳　江　秀　夫

1　は　じ　め　に

古墳時代の遺物は、考古資料の中でも縄文土器とともに古くから人々の興味をひき、その研究が進められてきたものが多い。中でも鏡・刀剣などをはじめとする鉄製品、金銅製品はその一種骨董趣味的な価値感からも注目を浴びており、過去に発見されていたものが一定程度の配慮を受け比較的良好な保存状態を保っていることがある。装飾大刀の中にもそのような例が多くみうけられる。

昭和61年7月19日から9月15日までの約2ヶ月間、群馬県館林市において、群馬県教育委員会および群馬県埋蔵文化財調査事業団、館林市教育委員会によって開催された「巡回展示会」[(1)]に邑楽郡千代田町の光恩寺で所蔵している遺物が出展された。その中には頭椎大刀の柄頭2個体をはじめとした金銅製の刀装具の断片と思われる遺物が多く含まれていた。光恩寺は弘法大師にゆかりのある真言宗の古刹で、阿弥陀堂に収蔵された木造阿弥陀三尊像は、「堂山焼出の弥陀」と称され、その名前の由来とともに美術工芸史上、鎌倉時代初期の代表作品として有名で県指定重要文化財となっている。また、境内には堂山古墳という前方後円墳が築造されている。この前方後円

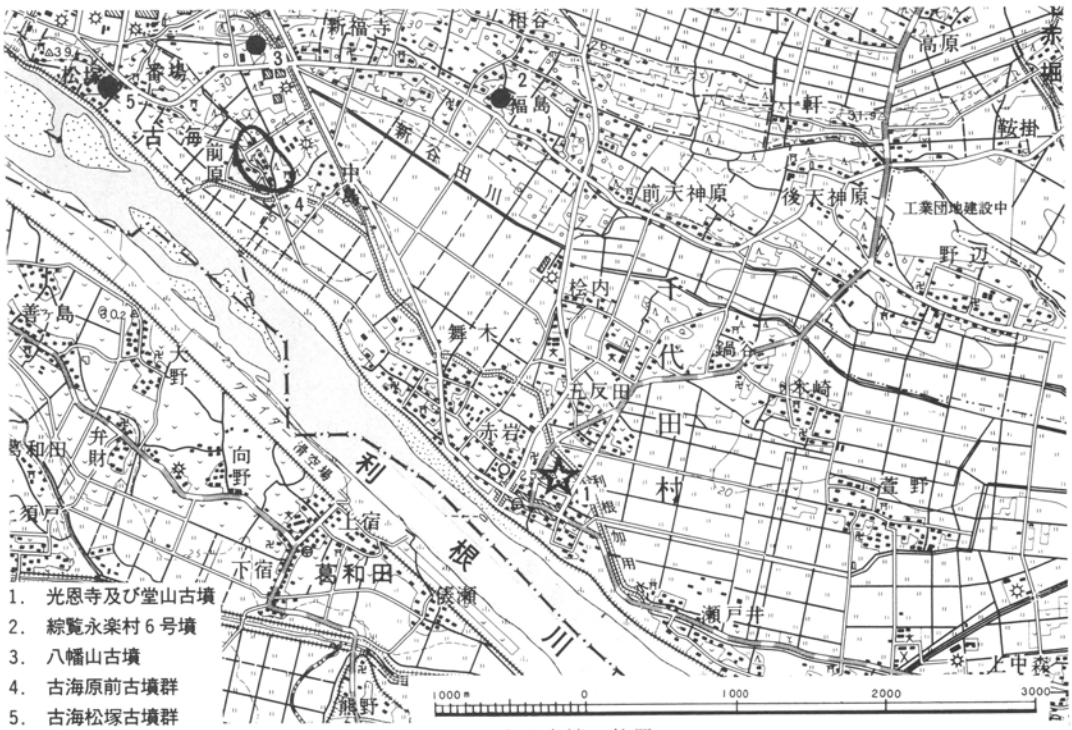


図1　堂山古墳の位置

墳は『上毛古墳綜覧』[2]に永楽村第1号墳として登載されており、その規模は全長約80mを有し、邑楽地域を代表する古墳のひとつである。ところで同寺には『堂山伝記』[3]と表書される文書が伝世しており、その中に延宝三年（1675）に寺域内の堂山から「藤原長柄」[4]にかかわる品々を発掘した旨の記述がある。このことから巡回展示会で展示された光恩寺所蔵の頭椎大刀をはじめとする遺物は堂山古墳出土の可能性が高く、これらの遺物を検討することは、堂山古墳、ひいては邑楽・館林地域の古墳時代の様相を理解するうえで重要なことと考えられた。

ここでは光恩寺所蔵の遺物についての基礎調査及び『堂山伝記』の検討結果を明らかにすることを第一の目的にするとともに、その作業を通じて気付いた点を整理し、装飾大刀研究についての現状を踏まえた上で堂山古墳の位置付けをめざしてみたい。

なお、今回の報告は、当事業団の職員で巡回展示会開催時に担当課員として、光恩寺から資料の貸借にあたった飯島義雄氏、同じく当事業団職員の右島和夫氏の三人で実施した現地踏査及び聞き取り調査に基づいたものであるが両氏のご配慮により筆者が執筆させていただいた。

2　堂山古墳の概要

立地　光恩寺及び堂山古墳の所在する邑楽郡千代田町は群馬県の東部、群馬県を鶴の舞う姿にたとえるならばちょうど首の部分に位置する。東は館林市に接し、南に利根川が東流する。対岸は埼玉県行田市、妻沼町である。周辺の地形は邑楽台地と呼称され、関東ローム層の上・中部ロームをのせる低台地とそれを開析する沖積地、そして利根川によって形成された自然堤防に分類できる。光恩寺のある赤岩の集落はこの自然堤防上に位置すると思われ、寺域の北側は萱野の集落の南側から西延する沖積地の一枝により蚕食されている。この沖積地は寺の北西0.3kmに谷頭を有していると思われる。

光恩寺はその寺域が東西250m、南北140mと広大なもので、堂山古墳はその北東隅に位置している。現在、本堂、庫裏の背後には堀のめぐる鈎の手形の区画があり、その内側には土塁が平行して残存している。また、この東側、堂山古墳の周囲にも地割と堀跡から方形区画が認められ赤岩城にかかわる遺構と推定されている。[5]本堂の西側には現状で径18.2m、高さ1.8m程の円墳があり、その南側にも小さな地ぶくれが認められる。本堂及び庫裏の北側の土塁は前方部を西側に向けた全長20から30mの小規模な前方後円墳と径10m程の円墳を再利用した可能性が強い。光恩寺に西接する安楽寺境内には径30m、高さ8mの米山薬師古

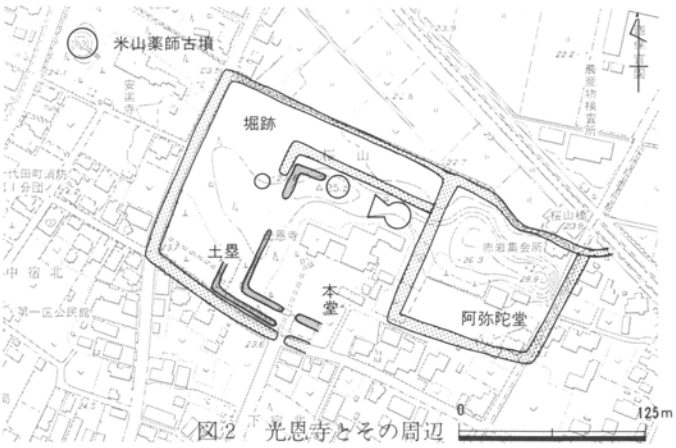


図2　光恩寺とその周辺

[6]
墳が現存する。過去の調査で主体部は角閃石安山岩を使用した横穴式石室であり、一部に緑泥片岩が使用されていたことが判明している。

さらに周辺の古墳の分布をみると大字福島に前方後円墳の永楽村6号[7]墳が、大字新福寺に全長50m以上の規模の前方後円墳で埴輪を有する八幡山古[8]墳がある。また、西接する大泉町古海原前には同向式画文帯神獣鏡を出土した古海原前1号古墳をはじめとし、円墳25基程からなる古海原前古墳群がある。

墳丘　堂山古墳はその主軸を東西方向に有し、前方部を西に向けている。現状の規模は略測で全長75.7mを測るが前方部の先端、後円部墳丘端のいずれもが削平されており、復元長は80m前後になると思われる。墳丘の高さは前方部、後円部とも約7m程であるが、後円部は、鐘楼を建立する際に削平を受けていると思われる。また、墳丘の南側は墓地の造成や阿弥陀堂、人家の建設によりその形状が著しく歪められているが北側の状況から墳丘が二段築成であることが解る。

周堀は墳丘の北側でその一部を確認できる。第二次大戦前には墳丘の南側に阿弥陀堂に付属する池があったと聞くがこれは古墳の周堀を利用したものである可能性が高い。

主体部　主体部は確認されていないが墳丘の形状や採集される埴輪から横穴式石室が想定できる。『堂山伝記』にも「岩屋」の記述があり妥当性のあるものと思われる。しかし、後円部の墳丘は大きく削り取られており、その状況からは墳丘削平時に石室は確認されたものの現在ではその大部分が存在しないと思われる。ただ、この古墳に使用されていたと言われる緑泥片岩の板石が古墳の北西0.5㎞、熊野地区の八幡神社にある。この板石は町内の長良神社で石橋として利用されていたものが田山花袋の歌碑の用材にと同神社に移築されたものである。歌碑として台座に据置された板石は最大長148㎝強、最大幅115㎝、厚さ10㎝である。この板石が石室用材とすれば横穴式石室の天井石と考えることが適当と思われる。

このようにしてみると堂山古墳は、微高地の縁辺に形成された古墳群のうちの一基で、周辺の古墳の中でも卓越した規模を有している事がわかる。

「堂山伝記」は元文二年(1737)、光恩寺の住職、香天により記されたものである。その内容は、堂山に安置されている阿弥陀仏にまつわるいくつかの記録であり、その中に堂山出土の遺物についての由来とそれらを発掘した経緯が記載されている。「伝記」によれば光恩寺には古くから上野国司讃岐弾正藤原長良が堂山に岩屋を組み立て甲冑・大刀・長刀その他の武具を収めたという伝説があったようである。延宝三年(1675)、阿弥陀堂の堂主、夢覚が夜半に堂山の中腹が光るのを不思議に思い、これを光恩寺住職の朝覚に話したところ、朝覚は、この出来事を藤原長良の伝説に関係あることと考え、村民とともに堂山中腹を発掘をしたというものである。発掘の様子については、岩屋を開口したところ甲冑、大刀、長刀を詰めた跡が確認できたが具足の縅の糸は腐っており、大刀の鞘も朽ちて金物だけが残っていたこと。これらの発掘品は領主に献上された後、寺に返却され、新しい器物に入れて保管されたということなどが記録されている。

図３　調査資料(1)

3　光恩寺所蔵遺物の調査

光恩寺に収蔵されていた遺物は木箱に収納され保管されていた。木箱は身の大きさが長さ90cm、幅23cm、深さ8.5cmであった。蓋の外面には縦書きの墨書で「延宝三卯年ヨリ寛政七年迄凡百二十一年□□／堂山石櫃ヨリ掘出太刀類入」と記されている。内面には「清和天皇御宇貞観年中／藤原長良朝臣堂山岩屋篭置シ／大刀並具足甲□延寶三年卯年／八月掘出□□也／元文三戊午歳／二月　日／赤岩山六拾三世／香天」とある。また、身の内面には「長良朝臣太刀／指添／鎧通」とある。内面の筆は『堂山伝記』を著した光恩寺住職香天によるものである。外面の記載は、延宝三年（1737）の57年後、寛政七年（1795）以後に記されたものである。（墨書中の□は未判読の文字の存在をあらわす）

収納されていた遺物は鉄直刀10点、鉄製刀装具としての鍔、鎺、鞘尻金具が各１点、金銅製装飾大刀の頭椎大刀の柄頭２点、切羽１点、縁金具の破片、柄間金具１点、鍔１点、鞘の足間あるいは鞘間飾板数点、鞘尻金具３点、責金具、金銅製透金具、鉄製刀子、鉄鏃、銅釧２点、鉄鎌である。鉄鎌を除いたその他の遺物はすべて古墳時代のものと思われる。以下その調査結果を記す。

鉄直刀　茎の存在数からは３振の存在が確実であるが刀身部分の観察からすると６振以上が存在していたと思われる。全体に腐蝕が進行しており図示した外にも小破片がかなり認められるが数量としては大きな変更を加えるには至らないと思われる。

直刀１（１）　茎尻から長さ56.8cmが残存する。茎は12.3cmを有し、茎尻に向かい刃側に反る形状でこのような例は稀少なものである。茎尻から3.4cmのところに目釘穴があり径５㎜の目釘が残存している。ほぼ直角に切り込まれた両関をへて刀身に至る。刀身は平造りで背の厚さは茎寄りで８㎜、切先寄りで７㎜を測る。刀身の幅は茎寄りで28㎜、切先に向けてやや細くなる。鍛えは、直刀４とともに今回調査した刀身のなかで最良である。刃には後世のものと思われる打撃痕があり鋸歯状を呈する部分が認められる。

直刀２（２）　茎尻から5.4cmが残存していた。形状は茎尻に向かって序々に細くなる。先端は丸くいわゆる栗尻である。厚さは背側で10㎜、刀側で７㎜を測る。茎尻から2.2㎜のところに径３㎜の目釘穴があり両端の欠損した長さ８㎜の目釘が残存していた。表裏両面とも木質が付着していた。

直刀３（３）　茎部分である。茎尻から9.5cmが残存している。形状は茎尻に向かって序々に細くなり先端はいわゆる栗尻を呈している。厚さは背側が４㎜、刃側３㎜である。茎尻から2.4㎜のところに径３㎜の目釘穴が穿たれており両端を欠いた目釘が残存していた。木質の付着が著しい。

直刀４（４）　切先から45.8cmが残存する。刀身の幅は2.8cm以下である。切先はふくらかれている。表面は全体に腐食が進行しており、特に背の部分のそれは著しい。平造りと思われ、背の厚さは６㎜前後である。切先から18cmのところに焼き入れ処理において刃側と背側の硬度差によって生じる反りの変化、いわゆるうつむきがある。直刀１と４は後世に研ぎ出されている。

直刀５（５）　刀身の残存は42.9cm、幅、31㎜である。平造りで背の厚さは８㎜を測る。錆化が

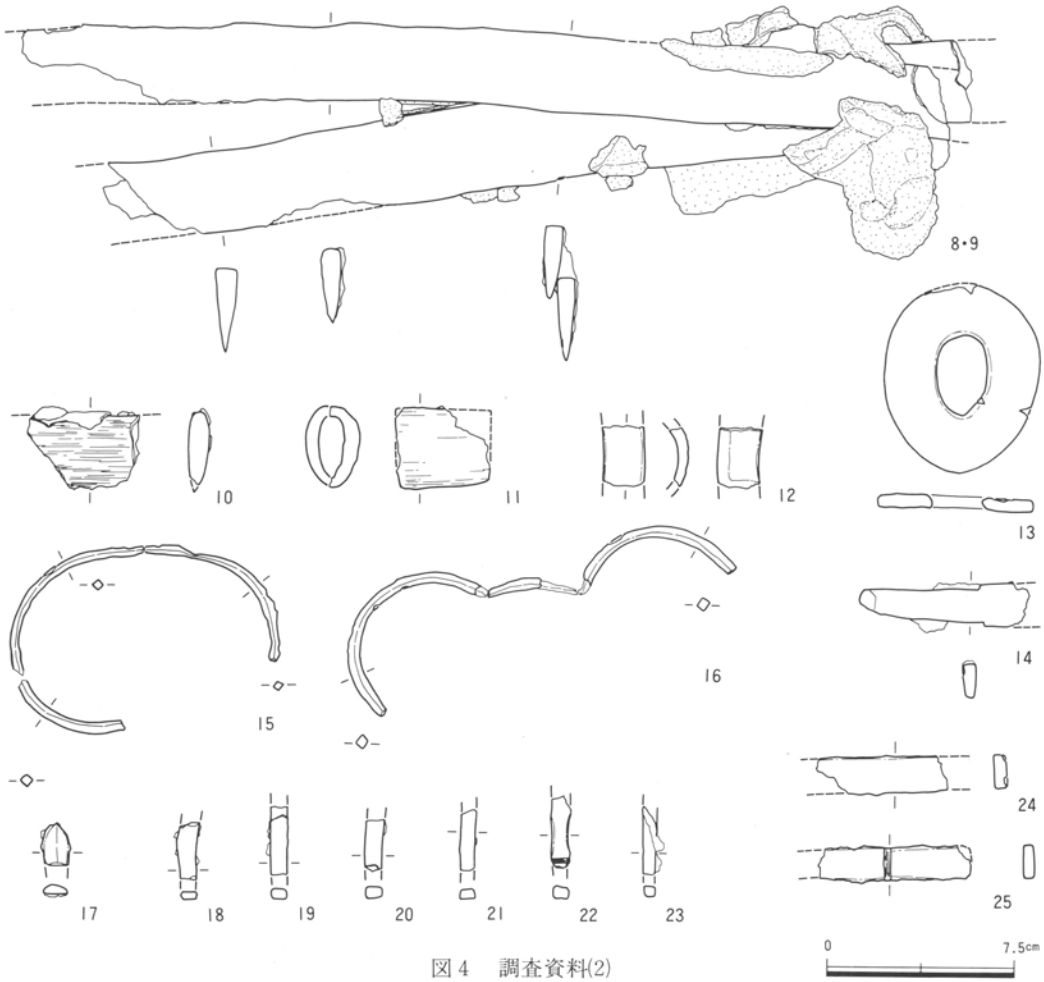


図４　調査資料(2)

進行していた。

直刀６（６）　残存長は27.9cmを測る。背は丸みを帯びており８㎜の厚さである。刀身の幅は29㎜を測った。佩用表、裏とも木質の付着が認められた。

直刀７（７）　刀身部分の32.8cmが残存していたが背側は殆ど剝落している。背は平棟に近いが錆化による剝落のためかえりがついたようになっている。厚さは8.5㎜である。茎寄りの6.3cmは変形し大きく彎曲している。佩用裏にあたると思われる側には木質の付着が顕著である。

直刀８（８）　錆化が著しく直刀９と癒着している。また、ふたつの直刀は小円礫とも癒着しているがこの礫は石室の床石と思われる。刀身の残存長は40cm、幅3.0cm、錆ぶくれして中空状をなしている。背の厚さは７㎜である。

直刀９（９）　刀身の残存は34.9cm、幅34㎜である。

直刀10(10)　刀身の4.5cmが残存していた。幅は29㎜以上を測る。鞘と思われる木質の付着が顕著である。それとともに金銅製板金の残片の付着が認められることから金銅製装飾大刀の刀身の一部と考えられる。

鉄製鍔(13)　無窓である。上端の一部が欠損しているが長さ7.5cm以上、幅6.3cmの倒卵形を呈している。錆化しているが厚さは5㎜程である。

鉄製★(11)　長さは36㎜を測る。断面形の約½が残存していた。長軸32㎜、短軸22㎜を復元できる。器面は錆化の進行により多少膨れているが厚さ４～６㎜を測る。

鉄製鞘尻金具(12)　長さ17㎜を測る。残存は断面形の½に満たず、残存長は23㎜である。厚さは3.5から4.5㎜である。鞘尻は平坦で、筒状金具に倒卵状の板金を熱圧着している。

刀子(14)　茎尻から6.6cmが残存していた。茎の形状は先端に向けて序々に細くなる。茎尻から4.7cmで背側に関があり、刃側の関は位置がややずれてある。両者ともやや斜めに切り込まれている。刀身は幅16㎜を測る。

鉄鏃(17～23)　小破片ではあるが図示した７点がそれと思われる。１点が鏃身、１点は鏃身から柄部にかけて、その他の５点は断面矩形の棒状であるが柄部の箆被あるいは茎にあたると思われる。17は鏃身の頭部で鑿箭式にあたると思われる。18も同様と思われる。22は幅６㎜、厚さ５㎜を測るが残存下端に繊維質の付着が見られる。

板状鉄(24･25)　ともに小口両端が欠損する。25は残存長６cm、厚さ４cmを測る。刃部はない。中位に緊縛痕が認められる。24は残存長4.9cm、厚さ５㎜である。

銅釧(15・16)　２個体分を確認できる。15は現状では２個の破片となっており約½は大きく歪んでいる。原形は外径７cmを復元できる。腐食のため部分的に痩せているが３×３㎜から3.5×４㎜の断面菱形の棒状品の両端を合わせたものである。16は菱形の断面の規模が４×４㎜から４×4.5㎜を測り、原形は6.4から7.0cmの外径を想定できる。現状では引き延ばされ、切断され３個の破片となっている。

金銅製刀装具　柄頭、切羽、縁金具、柄間金具、鍔、鞘飾板、鞘尻金具、鞘間金具になると思われる筒状金具、責金具が認められる。柄頭や鍔、鞘飾板、鞘尻金具などから複数の装飾大刀の存在が予想される。なお、部位の名称は桜井達彦氏[23]のそれに従った。

柄頭(26・27)　２個体の存在が確認できる。この他いずれかに属すると思われる小破片が少量ある。柄頭１は丸みの少ない倒卵形を呈し、長軸長9.2cm、横軸長5.9cmを測る。打ち出した２枚の板金を熱圧着していると思われるが、現状は押し潰されたように歪んでおり腐食も進行している。特に佩用裏にあたる面の欠損が著しい。畦目は片面に横畦１本と竪畦２本である。径９㎜の懸通穴が認められるが残存する遺物の中に鵐目金具は認められない。

柄頭２は長軸長6.6cm以上、短軸長5.8cmを図り１に比して小型であり全体の形状も丸みを帯びている。接合部分から佩用の表裏２片に分かれている。佩用表は押圧を受けて著しく歪んでいる。表面には４本の竪畦が認められる。また、径８㎜の懸通穴が穿ってある。

切羽(30)　形状は外縁の長軸長6.7cm以上、短軸長4.7cmの倒卵形を呈し、下端はやや尖る。厚さは0.8㎜である。外圧を受け３片に断裂している。下端に熱圧着の痕跡が確認できる。

縁金具(29)　長さ3.0cmの板状金具で両端が欠損している。縁金具と思われるが断定できない。

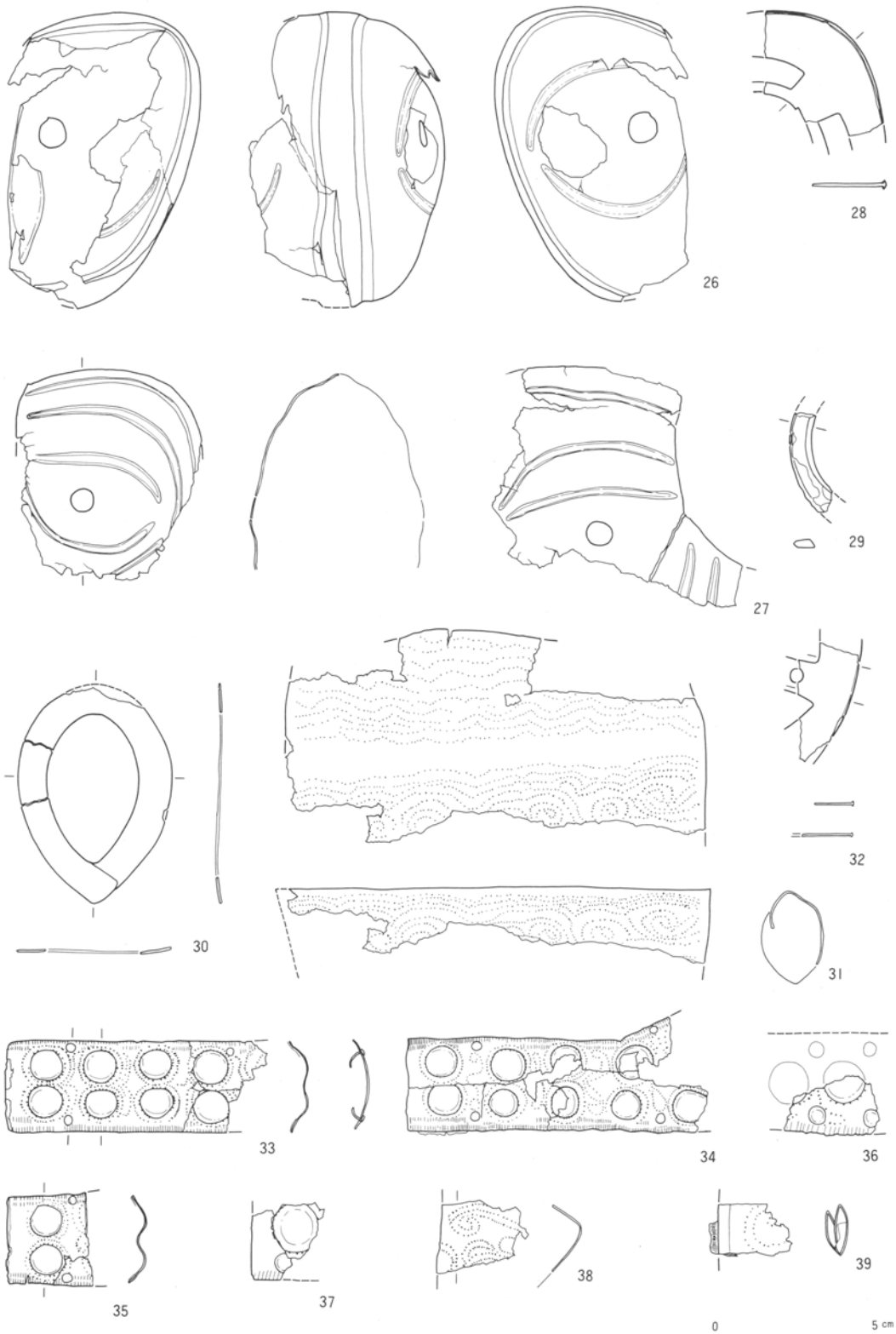


図5　調査資料(3)

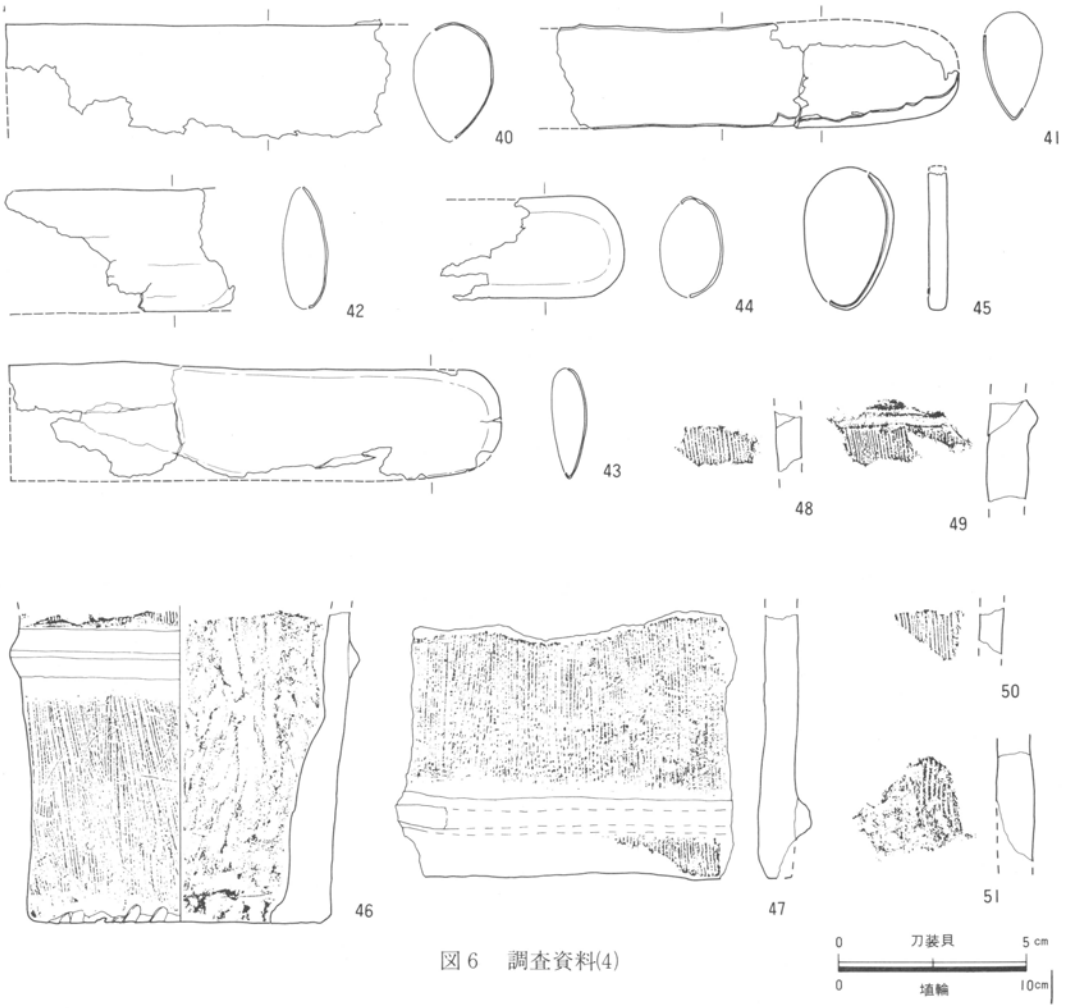


図6　調査資料(4)

幅7㎜、厚さ3㎜を測る。

柄間金具(31)　長さ13.6cmの筒状の板金で大小4片の破片となっている。下端、刃側の欠損が著しいがその部分に板金の合わせめがあったと思われる。断面の大きさは長軸2.3cm以上、短軸1.6cm以上を測る。佩用の表裏には列点打ち込みによる施文がなされている。佩用表側には渦巻文が6あるいは7単位配され、その上に波状の列点が4段連ねられている。佩用裏側には渦巻文は無く、波状の列点が10段重ねられている。列点の個々は鞘飾板と比較してやや大きい。佩用裏、柄頭側から6.9cmのところに径3㎜の穴状の空間が2箇所連結して認められるが留金の痕跡とは断定できない。

鍔(28)　原形は倒卵形を呈すると思われ、残存部はその上部破片であろう。台形の透穴が2箇所確認できるが全体では6窓になろうか。厚さは1㎜である。外縁は弱い打返し耳である。内縁には固着のためであろうか2箇所にくりこみがみられる。

鞘飾板(33〜37)

飾板１(33)　３片の破片が接合し長さ8.2cmを測るが短辺の一端は欠損している。幅は2.9cmである。器面には径10から11㎜の円文打ち出しが２段にわたって施される。上段に５個、下段に４個確認できる。また、円文の周囲には二重の列点打ち込みが廻る。円文と円文の間隙にも列点打ち込みによる文様が描かれているが一定の表現でない。長辺の両端部には長さ２㎜ほどの平行線の細かい刻みが１cmのなかに11から12本認められる。図示した左端から2.0cmのところと7.0cmのところに留釘が残存する。釘の長さは６～７㎜でいずれも内側に彎曲している。板金の裏面には長辺の端部に沿って非常に薄い板金が付随しそれに木質の付着が確認できた。

飾板２(34)　残存長9.5cm、幅2.8～2.9cmを測る。残存状態は不良で３片の破片が部分的に接合した。径９～11㎜の円文打ち出しが二段にわたり合計10個確認できる。円文の周囲には二重の列点打ち込みが、また円文の間隙にも列点打ち込みによる曲線文が認められる。長辺の端部には１同様の平行線の刻みがある。留釘は両端に２個ずつ残存する。両者の留釘の間隔は58cmで円文３個分である。

飾板３(35)　残存長2.6cm、幅2.8cmを測る。円文打ち出しとその周囲の列点打ち込みが確認できる。左端から2.1cmのところに留釘があるが上下の位置はややずれている。

飾板４(36)　残存長3.0cmの小破片である。外圧により著しく変形しているが幅3.2cmを推定できようか。中央に径13㎜の円文打ち出しがあり、その周囲に列点打ち込みがなされている。端部寄りには径５㎜の小型の円文打ち出しが1.7cmの間隔をおいて２点施される。また、長辺の端部にはやや斜方向に平行線の刻みが認められる。

飾板５(37)　残存長1.3cmを測る。板金の中央に径15㎜の円文打ち出しが、端部近くに径５㎜以上の小型の円文打ち出しがある。端部には４同様、斜方向に平行線の刻みが施されている。４と５は１～３に比較して厚さがやや薄い。

筒状金具(38～39)　残片で部位の判定は困難である。

筒状金具(40)　残存長10.2cmを測る。下端はすべて欠損しているが断面の長軸長は30㎜以上、短軸長は16㎜以上を測る。楕円形にちかい倒卵形である。鞘口あるいは鞘間の金具と思われる。

筒状金具(38)　筒状の板金の破片と思われる。端部の一部が残存している。器面には列点打ち込みが施され蕨手文、円弧文が表出されている。

筒状金具(39)　押圧により変形し折れ曲がっている。左端は金具で留められていたのか他の部分の器面と腐食の進行状況がことなる。器面には渦巻き状の列点打ち込みが見られる。内面には木質が付着している。

鞘尻金具(41～44)

鞘尻金具１(43)　全長13.1cm、幅2.9cmを測る。末端は緩やかな曲線を描く丸尻である。板金は刃側を折り曲げ、背側で圧着している。

鞘尻金具２(44)　残存長4.9cm、幅2.7cmを測る。二枚の板金を圧着している。

鞘尻金具３(42)　残存長6.1cm、幅3.1cm以上を測る。両端とも欠損している。

鞘尻金具４(41)　残存長10.7cm、幅2.7cm以上を測る。背側で圧着している。

責金具(45)　２個体を確認した。破片のため足金具の可能性もある。44は幅５㎜を測る。復元形は長軸長38㎜、短軸長25㎜を想定できる。もう一個体は幅７㎜を測る。２個の破片になっている。

金銅製透金具(32)　小破片である。曲線をなす外縁の一部が残存する。外縁は打返しによるためかやや肥厚する。矩形の透穴２箇所とその間に径４㎜の円形の透穴が確認できる。厚さは0.8㎜と薄い。鍔の断片である可能性もあろうか。

埴輪（46～50）

46は現在の阿弥陀堂建設時に周堀部分の調査で検出されたものである。その他の破片も堂山古墳の墳丘上やその周辺で採集したものである。46は円筒埴輪の基底部と第１段である。残存高は17cm、底径はやや歪んでいるが16.5cmを測る。突帯は断面三角形で粗雑なはりつけである。外面には一単位11～12本の縦方向の刷毛調整が、内面には縦方向の粗雑な指撫でが施されていた。47も円筒埴輪の下位の破片であろうか。底部の彎曲の状態からは形象埴輪の基部の可能性もある。これが円筒埴輪であれば低位突帯の一例となろうか。その他の破片についても同様の調整や焼成状態が認められ、それらはいずれも古墳時代後期の様相を呈している。

４　調査のまとめ

(1)　光恩寺収蔵遺物と堂山古墳　光恩寺収蔵の遺物と堂山古墳墳丘から表採した埴輪は前節で述べたとおりである。今回の調査により次の二つの事が確認できた。一つは光恩寺所蔵の遺物の所属についてである。堂山古墳の墳丘の観察や光恩寺境内における古墳と阿弥陀堂の位置関係などから、堂山伝記に現れる堂山とは堂山古墳を指すものであろう。また、伝記の内容には多少の誇張があるにしても、「岩屋」の発掘についての記録は当時の事実を伝えたものと考えられる。今回の調査で収蔵遺物の内容は、堂山伝記の記述内容に近似するものであることも判明した。そして、これらは寺から寺宝に近い扱いを受けながら継承されてきており、そのことは寺の所持する明治28年の記録に[10]記載されていることからも伺える。

このように光恩寺所蔵の遺物は、収納箱の墨書にもあるように「堂山」の岩屋出土の発掘品、即ち、堂山古墳の横穴式石室の副葬品と考えて良いようである。このことは堂山古墳の前方部と後円部の墳丘の高さがあい拮抗する墳形や出土埴輪の形状とも矛盾しない。

(2)　頭椎大刀の特徴　今回調査した頭椎大刀とそれに付随すると思われる刀装具に付いてであるが、鞘尻が３個体あることから３振以上の金銅装大刀が存在していた可能性強いが個々の部位の規模、金銅製板金への鍍金の状態、柄間や鞘飾板に列点文を施文した工具の共通性などからすると柄頭１に鍔、鞘飾板４・５、鞘尻金具１・３をひとつのセットとすることができようか。また、柄頭２、鞘飾板１～３、鞘尻金具の２または４がもうひとつのセットであると思われる。

先のものを頭椎大刀１、もうひとつを頭椎大刀２とする。両者とも資料の残存が極めて断片的

であり全体の様相を復元することは困難である。頭椎大刀１の柄頭の類例としては、群馬県桐生市三ッ塚古墳[11]や茨城県笄崎古墳出土[12]例がある。鞘飾板の意匠も板金の中央に大型の円文をそして縁辺に小型の円文を配している点が笄崎古墳例と共通している。また、京都府湯舟坂２号墳出土[13]の環頭大刀にも大小の円文打ち出しの配置が認められる。頭椎大刀２の柄頭の形状は、兵庫県文堂古墳[14]や埼玉県小見真観寺古墳[15]出土の一例、群馬県白石二子山古墳出土[16]例に類似する。鞘飾板に円文を上下２段配列する例は比較的多く、小見真観寺古墳や文堂古墳出土例をその代表に上げることができよう。ほかの形状の装飾大刀としては県内例では伊勢崎市安堀出土[17]例や桐生市川内天王塚古墳[18]出土の円頭大刀、赤堀町吉沢峯の綜覧赤堀村248号墳[19]や伊勢崎市清音１号墳出土[20]の金銅装大刀にも同様の意匠が見られる。但し、列点打ち込みによる細部の文様を検討すると堂山古墳出土例と全く同様のモチーフを持つものをみいだすことはできなかった。鞘飾板は小口端部が３点確認できた。このことから、頭椎大刀２の鞘は２区画以上が飾板で装飾されていたと考えられる。また、佩用裏の装飾については判然としないが筒状金具とした６図６・７など列点の施された板金が佩用裏にあたる可能性もある。

頭椎大刀の刀身についてであるが直刀10がその断片であることは確実である。それに直刀１の刀身の表面には、銅成分の付着が認められ、鍛造の状態からも頭椎大刀の刀身として遜色の無いものと言える。

ところで、頭椎大刀研究の端緒は、後藤守一氏の集成及び柄頭の型式分類[21]にあるといってよいだろう。その後の研究では、鍔、鞘の飾りなど刀装全体にわたりながらも主に柄頭の型式変化についての検討が重ねられてきてた。新納泉氏[22]は、群馬県隠居山古墳出土例の「筋金」を有し、無畦の形態を古式に位置付けた５段階にわたる型式の組列を考えた。それは柄頭の形態が無畦から横畦、竪畦へと変化するとの考えに立脚したものである。新納氏はこれを他の装飾大刀の型式組列との相互関係のなかで呈示するとともに須恵器による検証も加えた年代的位置付けをおこなっている。

また、桜井達彦氏[23]は、穴沢咏光、馬目順一両氏[24]の研究を受ける形で、柄頭には無畦と有畦の二系統の型式変化があることを再度指摘した。有畦の変化については横畦から竪畦への序列が呈示されている。

今回調査の頭椎大刀のうち頭椎大刀１は新納氏のⅤ式、桜井氏の分類の竪畦Ⅰに、また、頭椎大刀２は、新納氏のⅣ式、桜井氏の竪畦Ⅱに比定できようか。いずれにしても頭椎大刀の型式変化の中では新式に属するものである。

5　今後の課題として

今回の調査により、光恩寺所蔵の遺物は堂山古墳出土のものであることが確実になった。また、その中で堂山古墳の築造年代や被葬者の性格を考える上で極めて重要と思われる２振の頭椎大刀はその型式変化の中でも新しいものとして位置付けられることが理解できた。しかし、当初めざ

した古墳時代後期の社会における堂山古墳の位置付けについては何等その本質に触れる事のできない結果となってしまった。ここでは山積した問題についての整理をおこない今後の課題としたい。

(1) **堂山古墳の築造時期**　概要でも記したように堂山古墳の主体部は、横穴式石室と思われるが頭椎大刀をはじめとした今回調査の遺物の出土状態については全く不明である。群馬県における当該金銅製装飾大刀の副葬状況の検討が必要であるが、もし、これらの遺物が堂山古墳の第一次埋葬時の副葬品であれば、頭椎大刀の製作時期とその副葬時期すなわち堂山古墳の築造時期に大きな隔たりは無いものと思われる。新納氏の装飾大刀の編年観を援用して堂山古墳出土の頭椎大刀の年代的位置付けを考えてみると、新納氏は、頭椎大刀のⅠ式を580年頃としており、一型式の時間幅を10年程に考えているようである。そして、ⅣあるいはⅤ式は7世紀の前半の年代が付与されると思われる。このことからずれば墳丘から円筒埴輪を多数出土する堂山古墳の築造もほぼ同時期となろうか。但し、600年を前後する時期は須恵器の型式についての絶対年代の検討[25]がいまだ流動的と言わざるを得ないし、前方後円墳築造の終末の問題[26]についても幾つかの提起がなされている。今後はそれらの研究動向を踏まえた上で堂山古墳の築造年代について再度検討したいと考える。

(2) **堂山古墳被葬者の性格付け**　もう一つ課題としなければならないのは頭椎大刀を所持した堂山古墳の被葬者の性格付けである。頭椎大刀については、出土古墳や分布状況の分析を通して畿内政権が地域支配を拡大する過程で地方の首長層あるいは中小豪族層に賜与されたものと考えられている。現在、群馬県下では11例の頭椎大刀の出土が確認できた。その他、各種形式を含めれば相当数の装飾大刀の存在が知られている。それらの装飾大刀を佩用者が入手した契機について畿内政権とのかかわりの中で一律に考えて良いものであろうか。今後は今回不充分であった県下の装飾大刀についての基礎調査を進めるとともに、装飾大刀を副葬する古墳についてその周辺の古墳、集落（居住・生産）の動向を分析するなかで検討し、地域における装飾大刀佩用者の性格を具体化させたい。その上で、先学の研究成果を充分踏まえ、畿内政権と地域の首長者層、中小豪族層との関係についての検討へと進んで行きたいと考える。

この文章を稿するにあたり多くの方々の御世話を受けた。右島氏、飯島氏には文章作成全般にわたっての助言を受けた。また、当事業団の大江正行氏には頭椎大刀をはじめ刀装具について数多くの示唆と有益な助言を受けた。また、千代田町教育委員会には資料の貸出にあたり、群馬県赤堀町歴史民俗資料館の松村一昭氏には『綜覧』赤堀村248号墳出土の金銅装大刀の実見に際し、兵庫県埋蔵文化財調査事務所の櫃本誠一氏、村岡町教育委員会の中村典夫氏には文堂古墳出土の頭椎大刀の実測図の参照に際し、それぞれ便宜を図っていただいた。遺物写真は、当事業団の佐藤元彦氏の撮影によるものである。図版作成には新井悦子氏の手をわずらわせた。ここに記して感謝の意を表します。

末文ではありますが光恩寺住職の長柄行光氏には資料の調査についての快諾をいただくととも

に、多くの御配慮をいただいた。厚く御礼申し上げます。

註

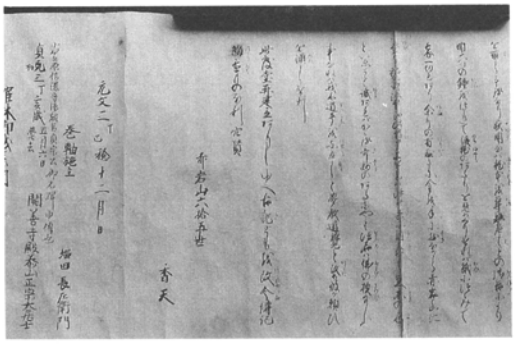
(1) 1983年（昭和58）以来、群馬県埋蔵文化財調査事業団が中心となり、文化財の保護活用の一環として実施している。1986年は、「利根川を下る歴史を遡る」と題し、館林・邑楽地域を中心とした利根川流域の埋蔵文化財の展示が行われた。
(2) 群馬県においては1935年（昭和10）に県下全域の古墳についての悉皆的調査が実施された。この時、現在の千代田町赤岩のある旧永楽村では11基の存在が確認されている。
(3) 原文は109行からなっており、『千代田村誌』に全文が現代語訳されて掲載されている。
(4) 邑楽・館林地方に多い長柄（良）神社の祭神に祭られている。『堂山伝記』では上野国司として記されている。また、千代田町および邑楽町の一部は『和名抄』の長柄郷に比定されている。
(5) 山崎　一氏の研究によれば赤岩城は、赤井氏の居城とされる。堂山古墳の前方部墳丘には赤井照光の墓と伝えられる五輪塔がある。なお、図２は山崎　一『上野国古城塁址の研究』（上）　1971年を参照し、それに筆者等の現地調査の結果を合わせ作成したものである。
(6) 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』1966年に登載されている。
(7) 『上毛古墳綜覧』に登載されている。
(8) 同上
(9) 石関伸一ほか『古海原前古墳群発掘調査概略報』大泉町教育委員会　1986年
(10) 光恩寺住職の御配慮により実見した。
(11) 後藤守一「頭椎大刀について」『考古学雑誌』第26巻８号1936年
『　〃　』第26巻12号1936年
(12) 末永政雄『増補日本上代の武器』1981年
(13) 奥村清一郎ほか『湯舟坂２号墳』　久美浜町教育委員会　1983年
(14) 町田　章「環刀の系譜」『研究論集』III　奈良国立文化財研究所　1978年
(15) 『新編埼玉県史』資料編　原始・古代　1982年
(16) 後藤守一『群馬県平井村白石稲荷山古墳』1934年
(17) 『東京国立博物館図版図録　古墳遺物編（関東III）』　東京国立博物館　1983年
(18) 『群馬県史』資料編３　1981年
(19) 松村一昭『赤堀村吉沢峯古墳発掘調査概報』赤堀村教育委員会1985年
(20) 『群馬県史』資料編３　1981年
(21) (11)の文献
(22) 新納泉「関東地方における前方後円墳の終末年代」『日本古代文化研究』創刊号1984年
(23) 桜井達彦「頭椎大刀の編年」『考古学ジャーナル』266　1986年
(24) 穴沢咏光・馬目順一「頭椎大刀試論―福島県下出土例を中心にして」『福島考古』18　1977年
(25) 新納氏は、「関東地方における前方後円墳の終末年代」で装飾付大刀の編年に絶対年代を付与するにあたり、須恵器の年代について論及している。新納氏は田辺昭三氏の陶邑編年のＴＫ43型式とＴＫ209型式の境を580年頃、ＴＫ217型式の上限を600年から610年頃としている。
(26) 群馬県における前方後円墳の築造の終末年代については、須恵器や埴輪の検討を基礎に６世紀後半にそれをあてる考えかたも有るようである。

堂山古墳

八幡神社田山花姿歌碑

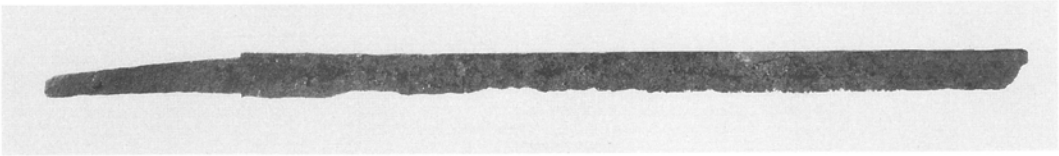
堂山伝記

堂山伝記

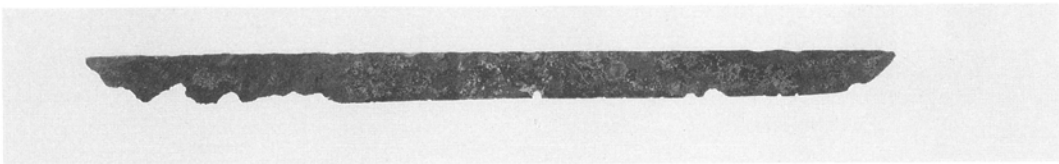


堂山伝記

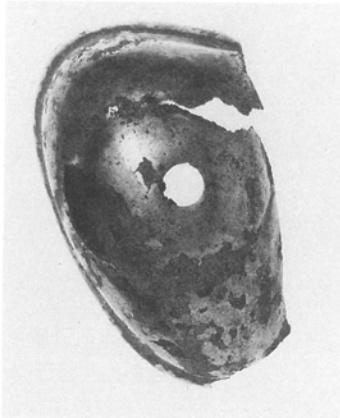
堂山伝記



直刀１（１）

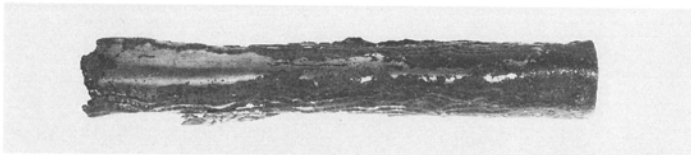


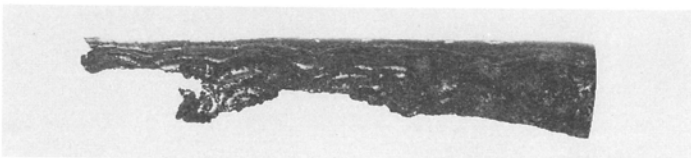
直刀２（４）



柄頭１（26）

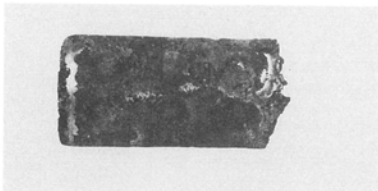
柄頭２（27）



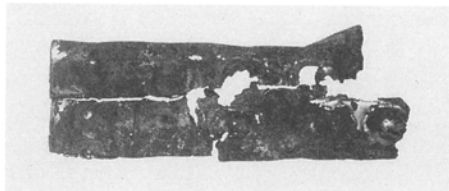


柄間金具（31）

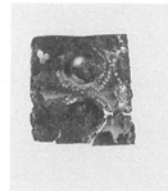
切羽（30）



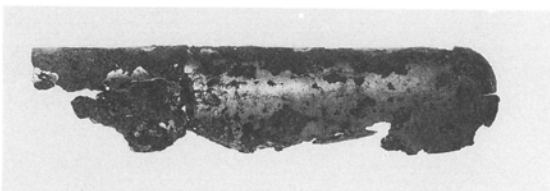
鞘飾板１（33）



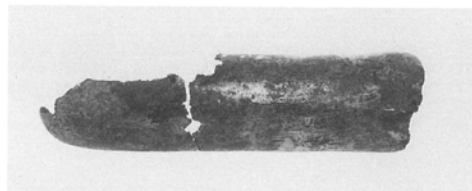
飾板２（34）



飾板３（36）

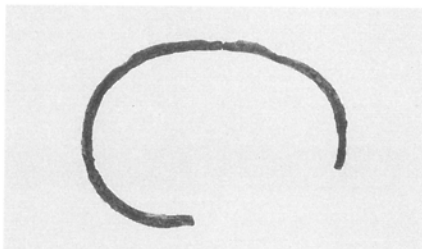


鞘尻金具（43）

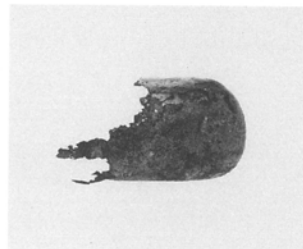


鞘尻金具（41）

鉄製鍔（13）



銅釧（15）



鞘尻金具（44）